



島隆記念碑

梅田町一丁目の鳳仙寺に向かう参道の途中を左に折れると、木立に囲まれた中に一風変わった記念碑を見つけることができる。

巨石の上部に蛇腹式の古典的なカメラが据えられ、前面には女性の顔のレリーフがはめ込まれている。日本の女流写真師第一号とされる島隆(しま・りゅう)の事績を顕彰するため、平成元年10月に建立された「島隆記念碑」であり、この地が生誕の地である。

島隆は文政6年(1823)に旧家・岡田吉右衛門の長女として生まれた。幼くして国学者橋守部の高弟、田村棍子の主宰する「松声堂塾」に入塾、読書、書道、和歌、作法を学び、才覚豊かだった。二十歳前に父母を相次いで亡くし、田村棍子の紹介で江戸一橋家の祐筆(書記)に採用され、当時同家に入出入りしていた島霞谷(かこく)と結婚した。

霞谷は下野国栃木の出身で、渡辺華山の弟子・椿椿山(つばき・ちんざん)に入門。南画のほか洋画や写真、鉛活字の発明、測量など多彩な才能の持ち主だった。隆は霞谷から難解な理化学的知識を必要とする写真術を伝授され写真館を手伝った。

霞谷と死別し、明治11年(1878)に桐生に戻った隆は写真館を開業、職業婦人の先駆けとして活躍した。隆が夫霞谷の肖像を撮影した湿版写真の裏側に、元治元年(1864)の日付けがあり、これは日本で初めて長崎と横浜で職業写真館が開業したわずか2年後。このことから、隆は日本初の女性写真師として大きく注目を集めた。

島家の土蔵の中から霞谷と隆の資料を整理し、その足跡を掘り起こしたのが郷土史家の山鹿英助氏、市民有志が島隆記念碑実行委員会を立ち上げ、所縁の地に建設した。実行委員長を務めたのが故河原井源次氏。除幕式で河原井氏は、「この記念碑は必ずや、桐生を訪れる人々の注目を集め、点から線へとつながるエリアのひとつとして、観光文化都市桐生へと飛躍する一助としたい」と力を込めて語った。その思いは四半世紀を経て、観光がまちづくりと一体となって取り組むべき大きな分野と位置付けられてきた現在にこそ継承されるべきものである。

日本の女流写真師第一号
島隆の事績を掘り起し顕彰